

9世紀の歸義軍政權と伊州

——Pelliot tibétain 1109を中心に*

岩尾一史

1. はじめに

848年、張議潮の下でチベット帝國の支配から獨立すべく蜂起した沙州（敦煌）の漢人たちは、チベット人を沙州から追い拂うことに首尾よく成功した。いわゆる歸義軍政權の誕生である。沙州を回復して以來、歸義軍政權は周邊の州を征服し支配下に組み込みはじめた。歸義軍が新たに獲得したそれらの土地のうちの一つに、沙州の西北に位置する伊州（ハミ）があった。しかし折しも勢力を擴大しはじめた西ウイグルは徐々に東進し、伊州にまで手を伸ばしつつあった。兩勢力は伊州で衝突し、結果として9世紀後半には西ウイグルが伊州を支配下に入れることになったのである¹。しかし歸義軍とウイグルの伊州をめぐる争いの経緯・過程については史料に制限があり、その詳細は必ずしも判明しているわけではなかった。

本稿で紹介する Pelliot tibétain 1109（以下、Pt.1109）は、今まで注目されることがなく研究もされなかったが²、筆者の見るところ、歸義軍と西ウイグルの伊州獲得戦の前後について比較的詳しい情報を有している。その点において、本文書は歸義軍期の沙州・伊州の関係を辿るための有用な史料となり得るはずであり、その内容を紹介するのも全くの無益ではあるまい。そこで本稿ではまずテキストの試譯を提供し、ついで内容について若干の考察を行いたい。

*本稿は2015年の敦煌國際學會學術研討會・京都2015での口頭発表を元にして作成した。席上、多くの方からコメントをいただいたが、特に松井太氏（大阪大學）からは有益なコメントとウイグル語に関する先行研究の存在をご教示いただいた。記して謝す。本稿はまた科學研究費（26770244、24242015）の成果の一部である。

¹この間の事情については、例えば李2007や森安2015：第二篇第6論文「ウイグルと敦煌」を参照されたい。

²文書カタログにても簡単な紹介にとどまる（Lalou 1950：62、王1999：152）。

2. Pelliot tibétain 1109

P.t.1109 は、敦煌莫高窟第 17 窟から発見された敦煌文書の一つで、現在はフランス国立図書館に所蔵される³。サイズは筆者の計測によれば最大幅 29 cm、高さが 54.4 cm で、用紙としては右端のみが完存している。

左端は全て欠損している。テキストは全体にわたって冒頭が失われているが、当時の敦煌産の紙の「高さ」（この文書では「横幅」）が約 31cm であったことを考慮すると、失われた部分は文書の最長箇所（第 30～32 行）で 2～3cm ほどであっただろう。なお現在 IDP などで公開されているデジタル写真を見ると第 27・28 行にてあたかも左端が残っているかのように見えるが、実際には他の断片を適当に貼り継いだもので、テキストは明らかに繋っていない⁴。上端は失われているが、後で述べるようにチベット文の手紙書式を考慮すると、失われたテキスト部分はあったとしても精々 1 行分であろう。下端は失われている。用紙は元々何枚かの紙を縦に貼り継いで

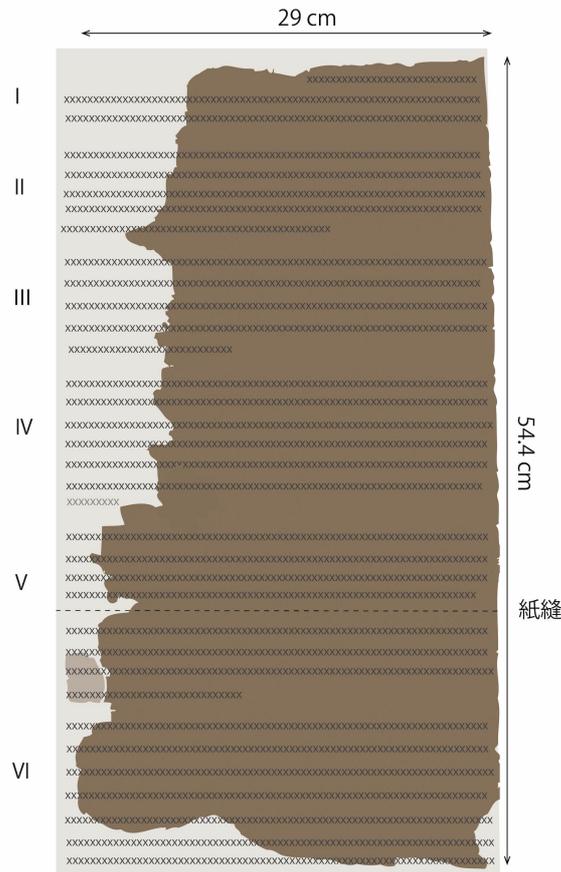


図 1: Pt.1109 の概念図

作成されたらしく、現存の用紙でもテキスト第 24 行と第 25 行の間に貼接部分が確認できる。

文書の表面 (recto) にはチベット文が記され、裏面 (verso) は白紙である。表のチベット文は一見したところ残存行数は 34 行のみであるが、文脈から判断して実際には第 19 行の下、用紙が失われた左端部分にもう 1 行あったことが確實である。したがって本稿では失われた 1 行を第 20 行とした上で、全 35 行とする⁵。

³Pelliot tibétain 1109 のデジタル画像は International Dunhuang Project (<http://idp.bl.uk>) と Gallica (<http://gallica.bnf.fr/>) にある。

⁴ただし断片の紙質や残存文字から判断して、元々同じ文書に属していたことは明らかである。

⁵もちろん、この勘定には上端、下端の失われた行は含まない。

文書テキスト上でまず気がつくのは第 24 行に zhang zhe が現れることである。これが漢語の「尚書」の音寫であり (Uray 1981 : 82)、敦煌文書に現れた場合はこの職官を有した歸義軍節度使を指すことは周知のとおりである⁶。また歸義軍政權下では、公文書・外交文書作成の際にチベット文を使う場合もあったことはすでに先行研究が指摘するところである⁷。したがって P.t.1109 が歸義軍期に作成されたことは間違いない。

文書の書式と機能を確認しておこう。テキストの第 1 行は用紙の中ほどから始まり、「[-]v[-] [tsh-ng] と gr[-] tar が文書を上申します」(/[-]v[-] [tsh-ng] dang / gr[-] tar gi mch[i]d gsol b'a) とある。この文言は明らかに、チベット語手紙文書タイプ III (personal correspondence か private letters) の冒頭書式「(受取手) に (送り手) が手紙を上申／送ります (受取手 la 送り手 kyi(s) mchid gsol ba')」に則っている⁸。そこで文書の送り手は [-]v[-] [tsh-ng] と gr[-] tar という 2 人であることがわかるが、残念ながら受取手の人名は文書の破損部分に書かれていたらしく失われてしまった。第 1 行の失われた部分か、あるいは第 1 行より上部の失われた部分にあったのであろう。

文書テキストは空白行によって分たれており、冒頭部を含めると 6 部ある⁹。冒頭部を除くと、各部の末尾には、「～するようにお願いします」(III 第 13 行 : du c[i] gngang) や「【以上のように】報告／上申します」(II 第 8 行 : gsold pa lags) などの表現がみえる。このように上申内容を小分けにする書式は、チベット帝國期に沙州から上級機關であるデカムに向けて送るために作成された上行文書 (草稿?) IOL Tib J 1254 (= vol.56, fols.73-74) にも確認できる¹⁰。チベット帝國の上行文書の書式¹¹ が歸義軍期にまで繼承されていたのであろう。

⁶尚書を含む稱號と各節度使との對應については榮 1996 : 129-132 の一覽表を参照されたい。

⁷例えば、次の研究をみよ。Uray 1981、Uray 1988、Takeuchi 1990、武内 2002、Takeuchi 2004。

⁸Takeuchi 1990 : 183 を参照されたい。

⁹第 24 行と第 25 行の間にも空白があるが、これは書記が紙縫部分を避けたからであって、内容的には段落が続いている。

¹⁰IOL Tib J 1254 の譯は Thomas 1951 : 73-80、藤枝 1961 : 277-278 にある。筆者もかつて内陸アジア史學會 (於富山大學、2011 年) における口頭発表で同文書の内容を紹介したことがある。詳細については別稿を準備中である。

¹¹とはいえ、その冒頭の書式は Takeuchi 1990 の言う手紙文書タイプ III (personal correspondence か private letters) であるので、公文書であるはずの當該文書がこの書式をもつのは一見奇妙ではある。これは Takeuchi の手紙文書分類のうちに、いわゆる上行文書が含まれていないことから起こった事態であるが、Takeuchi (1990 : 183) は、タイプ III の典型的表現 mchid gsol pa が低位から高位あるいは同位に向けて出されたことを示唆する、とも指摘しているから、タイプ III はもともと上行の傾向をもっていたとも考えられるのであり、今後はタイプ III の定義に上行公文書を加えれば解決できる。

3. 録文と試譯

以下に録文と試譯を掲げる。便宜上、テキストの空白行區切に合わせて各部をそれぞれI～VIと呼ぶ。また、第27・28行の左端に貼り付けられた斷片も併せて翻字を附す。なお言うまでもないが、本試譯はあくまで暫定的なものである。一部の解釋が困難な部分は無理に譯さず原文を載せるに留め、不明の部分は今後の課題としたい。紙幅の都合上、語釋に關しても最低限に留める。翻字の方法は基本的に Old Tibetan Documents Online (OTDO) の方式¹²に準じるが、加えて以下の記號を使う。

録文

- [- -] 文字が判讀不能の箇所。-の數で文字數を示す。
- [. .] 文字が判讀不能の箇所。文字數は不明。

試譯

- ... 文字が判讀不明のため譯出できない箇所。
- 【 】 譯文理解のために筆者が補った箇所。

① 録文

- I : (1) [. .] / [-]v[-] [tsh-ng] dang / gr[-] tar gi mch[i]d gsol b'a // (2) [. .] thang 'byam [zar] che // dgongs pa mthar phyIn // cI yang legs dgu zhiḡ du smon te // (3) [. .] na // bka' stsalḡ pa tsam du ci gnaḡ //
- II : (4) [. .] [-]ung sgra dang // bk'as spring bas mjal // mod la dmag bzang bkrabs ste // rtsa laM dang / (5) [. .] [-]an sgugs dang / gle gugs stsalḡ pa las // sog drug myI nyi shu rtsa gsum ^i tur du (6) [. .] ston zla tha cunga tshes bcu'i dgongs thebs nas // ^i cur mchIs ste // bod kyI nang du (7) [. .] // drag myIs 'phral du sug bnaḡs su ci 'tsal // pho nya dang dmag myi zhI sum du rmas pa'I (8) [. .] drug gI mdo rid gIs btab ste gsold pa lags //
- III : (9) [. .] ba yang // ril rad par drubs nas // lus la 'tshal zhIng mchis pa bshus pa lags ste // (10) [. .] [-]bra dbre chan yang mang // yar bzhes su mtshar chig myi rung gIs kyang // sku dpal gyI (11) [. .] za bog yug gcig / dog chig dmar po yug gcIg / rḡgul gi sga rag gcIg / men trI (12) [. .] [-]ku gsum / rm[-] y[u]g

¹²Imaeda et al. 2007 : xxxi-xxxiii.

gnyis // sug rgya stsald te // dgra blon ha yang legs las 'bul (13) [. . .] [-]I du c[i]
gnang //

IV : (14) [. . .] [-]sdus nas // dam zhag bgyis ste mchis na // spyI ni mas gsol yang
myi 'tshal // thugs (15) [. . .] yang gda' // byang ngos 'dir yang dgra [z]un du
gyurd te // myI ngan pa mnangs tsam gis (16) [. . .] [-]b du yang myi dpen // slan
cad rgol ba dag la yang srog phongs 'tshal du glo ba chung (17) [. . .] d[ma]g du
mchis pa'I rnam bya dgar stsald pa'I rigs saM myI rigs // bk'a lung cI (18) [. . .]
[zh]ig mchIs pa ni // mkhar rkyen gi mtshon cha ma mchis ste // yang yang snga
slad du snyan (19) [. . .] / [-]r bzhes su yang myi rung na' // mkhar rkyen du gtd
pa tsham du thugs dpags cir (20) [. . .]

V : (21) [. . .] [-]g ^i cur thebs pa nyi shu rtsa gsum dang / tshes bcu gnyis gI gdugs la
// ju yen gi rgyud nas sog po tham (22) [. . .] gnyis mchIs pa'I chIgs la // khrom
chen po ju yen na btab pa'i tshe // bdag cag myi gsuM khrom mdab du (23) [. . .]
// rgya zhang lon dpon g.yog bzhi dang mjal nas // lus btsal te men trI yug gnyis
byung ba nI 'tshald (24) [. . .] stsald nas // khyod [-] gnyi ^i cur song zhig par
// zhang shes lung stsald ces mchi ba dang / (25) [. . .] shu rtsa lnga la // smas
'drams che ba mchI rngo myi thog pas bton pa'I slad na' // bi rog sa 'on la stsogs
p'a // (26) [. . .] kyi s[k]yel ma dgra blon ha yang legs dang / mkhar bsel las myi
nyI shu zhig las brdzangs pa dang / sha cu nas 'a zha myi bros tshe bra (27) [. . .]
mchIs pa // 'dab cig mkhar na 'khyam zhIng mchis pa las zun nas // ra mgo nI
'phral du khirms dang sbyard // (28) [. . .]g dang dus gcig du brdzangs pa lags //

VI : (29) [. . .] byang ngos gyi nyams nI pho nya [s]ong [-] ngan bsam bas gsold pa
lags // ^i cu yang so'I mta'a // rje blon [-]ng nI shul (30) [. . .] tsa[s] du gyurd /
/ dgra bsnnyengs ched po zhig byung na yang ram 'da' khu skad kyis nyI myi slebs /
/ yul mkhar myi shor ba dang / (31) [. . .] tshugs zhig du brgal 'tshal // zhib du
nI zha sngar mthong ba'I dusu gsold pa lags // bsnnyeng snon sha cu'i (32) [. . .]
[-]s las gnang ba ni gcIg la yang mtshon ca ma mchIs pa'I steng du rad pa dgun cha
'tshald pa ni 'ga' yang ma mchIs // (33) [. . .] myi nyI shu zhig bs[r]angs pa ya[-]
[- -] cha ma mchIs shes gsold te ril 'then ba las // bzang bkrabs ste tha [- -] (34)
[. . .] byung na yang bu smad dang brtse ba la bsnong ba ni ma mchIs // blar [- -]
(35) [. . .] [-i. . .I. . .]

断片

(1) rting [. . .] (2) 'bang[-] [. . .]

② 試譯

I : (1) . . . [-]v[-] [tsh-ng] と . . . gr[-] tar が報告します。(2) . . . 平原は廣がり . . . は大きくなり、御考えは萬全で、萬事首尾よくいくことを祈願し、(3) . . . ご命令を下されますよう申しあげます。

II : (4) . . . からご命令が送られたので拜命しました。すぐに精兵を選んで幹線路と (5) . . . の待機 (? sgugs) と荒地 (? gle gugs) ¹⁾を賜った。それからソグドとウイグル²⁾の 23 人が ³⁾ *vi tur du* (6) . . . 9 月 10 日の夜になって伊州にやって来て、チベットのなかに (7) . . . 兵士たちが即刻手ずから *bnangs*⁴⁾することを お許しください。使者と兵士を *zhi sum*⁵⁾に尋問した (8) . . . 【ソグド人・】ウイグル人の人相書きで示して、報告します。

III : (9) . . . も、全て首尾よく⁶⁾解決した。身體検査をして所持品を取りあげまして (10) . . . 汚れた所持品も多い。お上が受領されても珍しい物はないものの、聖なる御身の (11) . . . 【所持品は以下のとおり。】

*za bog*⁷⁾ 1 疋 紅一色 (? *dog chig dmar po*)⁸⁾ 【の布】 1 疋 銀製の
鞍 1 つ 紬 (*men tri*)⁹⁾ . . . (12) 3 つ . . . 2 疋。

【報告者の】私印を押し、敵將の何ヤンレクが献上【したものを送ります。】 (13) . . . どうかお願いします。

IV : (14) . . . 集まって、誓約をしていますので、一般的なことについては、下から報告することはしません。御心 . . . (15) . . . することもある。この河西回廊 (*ha se byang ngos*)¹⁰⁾が敵味方【の関係】になって、悪人で権力を持つ者が (16) . . . する必要もない。今後、命を惜しんで臆病な . . . (17) 軍に所屬する者たちに褒美を與えるべきでしょうか。ご命令をどうぞ【お下しください。】 (18) . . . については、城内に武器がなく、何度も繰り返し苦情を . . . (19) を受領すべきでないので、城内に交附くださるようどうぞ (20) お願いいたします。

V : (21) . . . 伊州に到來した 23 人に加え、12 日の日中、柔遠 (*ju yen*)¹¹⁾の方からソグド人の (22) . . . 2 人がやって来た。【彼らの】言によると、

【歸義軍の】軍團 (*khrom*) が柔遠に置かれた際、我々 3 人は軍團の傍で . . . (23) 漢人の役人の主従 4 人とお會いました。身體検査をして、紬

2 疋がでてきたのを、tshal (24)... を賜り、「お前たち 2 人は伊州に行け」と尚書が命令をくださった。

と言う。(25)... 25¹²⁾【人の内譯】は、

重傷で動けない者 (smas 'drams che ba mchI rngo myi thog pa) を除き、
ブイルク¹³⁾とサンゲン¹⁴⁾たち、(26)... の案内役 (skyel ma) である
敵將の何ヤンレク¹⁵⁾と城の警備人のうち 20 人を派遣した一派
沙州の吐谷渾の逃人¹⁶⁾ツェダ (27)... が納職城 ('dab cig mkhar)¹⁷⁾
に流れ着いて来て仲間となったが、【納職城の】隊長 (ra mgo) が
すぐに【歸義軍】取り決めと照らしあわせて、(28)... と一緒に
送ってきた一派

です。

VI : (29)... 河西回廊の状況については、使者の孫ゲンサムが報告します。伊州は國の境にあり、主従... (30)... tsa[s] になった。懸念すべき敵が現れても、援軍は呼びかけ (khu skad)¹⁸⁾でも來ない【が、】州城は落ちていない、(31)... 駐屯地 (tshugs) にて乗り切ります。詳細は御前に拜謁したときに報告します。増大する脅威は、沙州の (32) ... から與えられたものについては、一つも武器がない上に、冬の外套を作る布さえほとんどない。(33) ... 20 人を糺しても... 【武器】がない。以上のように報告し、全體數を減らし、精兵を選んで... (34)... にあるものも家族や親しい者 (rtse ba) の分の餘剰がない。お上に對して... (35)

[斷片]

(1) rting... (2) 民...

③ 語釋

- 1) **gle gugs** : Thomas 1955 : 121 の解釋 'corner (?) of rough land' に従う。
- 2) **sog drug** : この時期の sog がソグド人を指すことは、9 世紀後半のものともみられる Pelliot chinois (以降は P.ch. と略) 2762 verso の蕃漢對照語彙集¹³⁾ に sog po = 胡 (ソグド人) とあることから確實である (森安 2015 : 106-107, 394)。一方の drug はテュルク族一

¹³⁾この文書の存在を學界にはじめて紹介したのは Pelliot であるが (Pelliot 1912)、これは簡報の類であり、その後 Pelliot の遺稿の一つである Pelliot 1961 にてようやく全體像が紹介された (同書 : 143-144)。

- 般を指し、したがって突厥かウイグルのいずれも意味するが、Pt.1109の時期（9世紀後半）にウイグルが *dru gu* と呼ばれたことがやはり P.ch.2762 verso に *dru gu* = 迴鶻とあることから確實であるから（森安 2015：106-107）、ウイグルと見て間違いないだろう。問題はこれらが具体的にどのような人々であるかであるが、それは後に述べよう。
- 3) *ʿi tur du*：詳細は不明だが、人名あるいは官職名かもしれない。いずれにせよチベット語ではないことは確かである。
 - 4) *bnangs*：不明な語。
 - 5) *zhi sum*：不明な語。文脈からみて「詳細」「仔細」を意味するのかもしれない。
 - 6) *rad par*：*ran par* ‘moderately’（Jäschke 1881：524 *ran pa* 項）と解釋した。
 - 7) *za bog*：直後に布帛の計量単位である *yug* が続くから布類であることは間違いがないが、具体的な種類は未詳。
 - 8) *dog chig dmar po*：布帛の計量単位 *yug* が続くから *dog chig dmar po* が布の類であることは間違いがない。*dmar po*「赤い」は問題ないが、*dog chig* がこのままでは讀めない。もしこれが *mdog gcig* の異綴とみれば「単色」の意味になるから、紅一色の布ということになる。ただし布の種類はわからない。
 - 9) *men tri*：この語を「紬」と解釋すべきことについては、Takeuchi 1995：188-189 と吉田 2006：60 を参照されたい。
 - 10) *ha se byang ngos*：P.ch.2762 verso にある蕃漢對照語彙集に *ha se byang ngos* = 「河西一路」とあることから（森安 2015：106-107）、この語が河西回廊を指すことがわかる。なお山本（2011：48, n. 28）によれば、13～15世紀には *byang ngos* が涼州を指す例がある。
 - 11) *ju yen*：地名の「柔遠」（Karlgren 1957：1105b 「柔」 *úziǰu*；256f 「遠」 *jiwen*）にあたる。柔遠縣は伊州治下の縣で伊州から東南 240 里（約 135km）に位置した（『元和郡縣圖志』卷 40「伊州柔遠縣」）。Cf. 嚴 1985：445。
 - 12) [. . .] *shu rtsa lnga*：はじめの 1 音節が缺けているが、*gnyis shu rtsa lnga* 「25」と復元できることは明らかである。伊州に來た 23 人のソグド人・ウイグル人グループと柔遠から來た 2 人のソグド人（実際には 1 人の吐谷渾人を含む）を合計した人数である。
 - 13) *bi rog*：ウイグル語 *bīruq*、*buyrug* の音寫で、可汗に使える官僚を指す。Cf. Hamilton 1955：150、森安 1991：197。チベット語文書では、Pt.1189 にも *ʿbyi rog* として現れる。Cf. Uray 1981：83、赤木 2006：80。
 - 14) *sa ʿon*：トルコ語の *saγun* (> Ch. 將軍) の軟口蓋鼻音が不安定化した *sayun* であり、五代～宋の漢文史料で「娑溫」や「索溫、左溫」などと寫されるものと同一であることは間違いがない。Cf. Hamilton 1955：155；1977：510。このサンゲンが官職名だとすると直前のブイルクとサンゲンのあわせて二人の官職が擧げられていることになるし、個人名だとするとブイルクであるサンゲンということになる。筆者は、このグループの合計が 23 人ということ considering、サンゲンを官職名と考えた。
 - 15) *ha*：漢人姓「何」の音寫であろう。「何」はクシャーニーヤ出身のソグド人が名乗るいわゆるソグド姓であり、さらに彼が率いる集團が「ソグドとウイグル」と稱されることから、彼自身もソグド人である可能性は極めて高い。いわゆるソグド姓に関しては福島 2005、齊藤 2009 が参考になる。ただし個人名のヤンレクはチベット語人名である。
 - 16) *myi bros*：辭書には未登録の術語である。ここでは「逃人」と解釋した。

- 17) **'dab cig mkhar** : まず mkhar は「城」の意である。次に'dab であるが、高田 1988 の附録 3 資料對音表によるとチベット文音寫'dab で示される漢字としては「納」がある (同 no. 0542)。するとすぐさま思いつく地名は「納職」であろう。納はもちろんとして、職も音が合うことは Karlgren (1957) の中古音からも明らかである (「納」K695h : nâp、
「職」K920a : tsjək)。納職 (現在のラプチュク Lapčuq) は伊州にかつて屬した地であり、伊州からは東北 120 里のところのところに位置した¹⁴。森安 (1990 : 79) は、高田時雄氏の教示を紹介して、9 世紀以降の東部天山地方での漢字音、いわゆるウイグル字音では納職は*dap-čik と復元されると述べている。この復元形は、興味深いことに我々の文書に現れる形と一致する¹⁵。以上により、この城が納職にあたることは間違いなからう。
- 18) **khu skad kyis ni mi slebs** : 古チベット語契約文書 P.t.1094 にも並行した表現 bsnyag pa 'i khu skad kyis mi slebs na が現れ、Takeuchi (1995 : 140) は “if [he] cannot be reached by calling” と譯している。本稿の譯でも参考にした。

4. 文書の年代と背景

まず文書の年代と歴史的背景について検討したい。P.t.1109 で繰り返し報告されているのは伊州の防禦體制の薄さであり、敵の襲來聯絡が傳わらないことや武器や冬の外套さえ満足に揃っていない様子が報告されている。このような防禦の不備が報告されたのは、つまるところ伊州近邊に軍事的危機が存在したからこそであろう¹⁶。

注目すべきは V の、歸義軍の軍團 (khrom)¹⁷ が柔遠に置かれたという記述である。柔遠は伊州に屬する縣 (『新唐書』卷 40 地理志伊州伊吾郡條) で、伊州の東南 240 里 (約 135km) に位置していた (『元和郡縣圖志』卷 40 伊州條)¹⁸。つまり當文書の作成時期、歸義軍の軍團は伊州の附近まで来ていたのであり、しかも、V によると軍團から「尚書」が命令を與えていたのだから、當然この軍團は歸義軍節度使本人により率いられていたことになる。要するに、歸義軍節度使本人が出

¹⁴ 『元和郡縣圖志』卷 40 伊州條。

¹⁵ なお納職については Pelliot (1916 : 117-119) の言及をはじめとして幾つかの論考が存在するが、今は森安 1990 : 72-80 を挙げておく。

¹⁶ なお II によると、伊州では命令を受けて精兵を選び、彼らに荒地が交附されている。兵隊の屯田が指示されたことを示しているのかもしれない。

¹⁷ khrom は元々古代チベット帝國の軍事行政單位で、チベット中央部以外の地域に置かれた。Uray (1980) がこの軍事單位を研究し、“military government” と定義附けた。我が國では武内 (1990 : 39) の譯「軍管區」がよく使われるが、文脈によっては山口 (1980 : 203 ; 1981 : 17 等) が解釋するように「軍團」を意味する場合もあるようだ。khrom の用法は歸義軍政權時代にも引き繼がれ、僕射 (bog ya) が涼州に khrom を置き、そこから命令をくださったことがチベット語文書 IOL Tib J 134 (= Ch. 73, iv, 14. Thomas 1951 : 48) でも確認できる。

¹⁸ また P.ch.2862 「天寶時代燉煌郡會計帳」によると、瓜州常樂縣から伊州へ向う路に沿って設置された驛のうち、「伊州柔遠縣界」には赤崖驛があったという (菊池 1980 : 136)。

征するほどの危機的状況が伊州周邊で起こっていたことは間違いないのである。

では、そのような事態に至ったのは何時なのであろうか。當文書には月日の記述があるのでそれによって出来事を整理すると、次のようである。

- ・9月10日、ソグドとウイグルの23人の集團が伊州に現れた。そこで彼らの身柄を拘束して尋問し、彼らが所持していた物品を歸義軍政府に献上した。
- ・9月12日、柔遠に設置された歸義軍の軍團附近にいたソグド人3人を捕まえ、そのうちの2人が歸義軍の尚書によって伊州に送られた。

そこでPt.1109は9月12日以降に記されたということになる。問題は作成年である。伊州が歸義軍の支配下に入ったのが850年であることは、光啓元(885)年に書寫されたS.367『沙州伊州地志』に「大中四年張議潮修復」とあることから確認できる¹⁹。しかし歸義軍の伊州支配は必ずしも長く續かなかったようで、後にウイグルの侵入を受け、李(2007:13-14)によれば乾符元(874)年冬から乾符2(875)年1月の間に、あるいは榮(1996:185)によれば乾符3(876)年4月24日に歸義軍の支配が終わったのである。

Pt.1109の内容を再確認すると、伊州は歸義軍政權の支配下にあったことが読み取れるから、作成年代は850年から遅くとも874年～876年の間にあたることになる。さらに、Pt.1109には「尚書」が登場していた。歸義軍時代の敦煌文書に現れる「尚書」が歸義軍節度使の有する肩書に由来したことはもはや議論の餘地はないが、問題はどの節度使がこの尚書に該当するかである。榮(1996:129)によると、850年から876年の間に尚書の肩書きを有していた可能性があるのは張議潮と張淮深の2人しかおらず、さらに張議潮が尚書と呼ばれたのは848年から858年までであり、張淮深は872年から890年までである。したがって、Pt.1109の年代と時期は、850年～858年(張議潮)か、あるいは872年～876年(張淮深)のいずれかである。

しかし、張淮深の時代に伊州に攻撃を加えたという記録は今のところ見つかっていない。それに對してこの出来事に關係するような歴史的イベントが、張議潮の功績を述べる『張議潮變文』(P.ch.2962)²⁰に現れる。今、『張議潮變文』に現れる關係事件を簡単にまとめてみよう。

- ・大中10(856)年6月6日：數年前からウイグルが納職に居し、彼らが伊州に侵入を繰り返した。そのため、張議潮が自ら伊州に出向いてウイグルと吐谷渾を破り、ウイグルは納職城に立てこもった。

¹⁹例えば羽田1957:589をみよ。

²⁰『張議潮變文』については多くの録文・校訂テキストや研究があり枚舉に暇がない。ここでは黄・張(校注)1997:180-190を挙げておく。

- ・大中 11 (857) 年 8 月：前年 10 月、西ウイグル國の龐テギンを冊封するために唐から派遣された王端章たち使節團は、途上でウイグルに劫掠され、一行は散り散りになった²¹。使節團の一人である陳元弘から報告を受けた張議潮は怒り、ウイグルを討つことを決めた。8 月 5 日、伊州刺史王和清から、ウイグル 500 餘騎が伊州に迫っているという聯絡が沙州に來た。

森安 (2015 : 301) が指摘するように、857 年 8 月にウイグルが伊州に迫ってきた後、二度目の戦闘があったのは間違いないが、残念ながらテキストがここで切れてしまっているために結末は分からない。しかしいずれにせよ張議潮は 856 年 6 月と、おそらく 857 年 8 月以降の二回、對ウイグル戦のために伊州近邊に行ったとみなしてよからう。

ただし、『張議潮變文』には、856 年の對ウイグル戦に勝利した後「即ち沙州を望みて返る」(即望沙州而返)、とあるから、歸義軍は勝利後すぐに沙州に戻ったらしい。一方で、Pt.1109 によると某年 9 月の時点で歸義軍の軍團はいまだ柔遠に駐留していた。戦争後に三ヶ月も伊州近邊にとどまっていたことと、すぐに沙州に戻ったという『張議潮變文』856 年の記述とは明らかに矛盾する。したがって、Pt.1109 は 856 年に作成されたのではない。

すると唯一残る可能性は、857 年 8 月 5 日以降に起こったはずの對ウイグル戦後、ということになる。もしこの推定が正しいとなると、8 月 5 日に伊州から急使が來たあとすぐに張議潮は出陣して戦争に勝利した。そしてその後 9 月 10 日になって納職からソグドとウイグルのグループが送られた、ということになる。

このような理解が正しいことを前提にした上で、テキストに再度戻りたい。筆者が目したいのは Pt.1109 の差出人である。Pt.1109 の第 1 行には文書の差出人として [. . .] [-]v[-] [tsh-ng] と gr[-] tar なる 2 人の人物が擧がっていた。彼らは伊州からの報告をまとめた人物であるからそれなりの高位にあったはずである。『張議潮變文』によると、8 月 5 日に伊州の急を告げた伊州刺史の名前は王和清であった。もし王和清が 9-10 世紀の河西方言の音價でチベット文字音寫されるとすると、wang (王) hva tsheng (和清) となると考えられる²²。もし差出人のひとりである [-]v[-] [tsh-ng] がもともと hva tsheng であるならば、まさしく「和清」を寫していた、と考えられるのではないか。もしこの考えが正しいとすると差出人のひとり

²¹なお大唐西市博物館新獲墓誌にこの使節團副使李潯のものがあり榮 (2013) が紹介している。榮によると、このとき使節團を襲った一派は西ウイグルの龐テギンと別の集團であるらしい。

²²高田 1988 の附録 3 資料對音表を参考にした。同表の各文字番號は王 : 0956、和 : 0042、清 : 1068 である。なお、チベット語・漢語の對音を調べるレファレンスとして周・謝 2006 も有用である。

は王和清であり、Pt.1109は857年の對ウイグル戦後、伊州刺史王和清たちが張議潮に送った報告ということになる。

5. 伊州に來た集團と西ウイグルのソグド人

上記のような危機的状況の下、Pt.1109によると伊州には2つのグループが到來していた。まず、伊州にやって來たソグド・ウイグルなる23人の小集團であり、そして柔遠の歸義軍の軍團からやってきた「2人」のソグド人である。それぞれの内訳は次のように説明されている。

- ① ウイグルのブイルク、サンゲン、案内役の敵將何ヤンレクと城の警備人のうち20人
- ② 沙州から納職城に逃げた吐谷渾の逃戸ツェダ某たち

①の何ヤンレクに案内されたウイグルのブイルクたちの目的地は、「チベットのなかに」（第6行）とあることから推測すると元來はチベット人勢力との聯携を目指していたらしい。彼らの目的が攻撃でないことは、IVに何ヤンレクの獻上品がリストしてあることから明らかである。したがって、彼らはウイグルの使節團といてよい。一方で後者の「ソグド人」と稱されるグループ②は、実際には沙州から逃げた吐谷渾人たちを聯行していたことがこの箇所からわかる。彼らが歸義軍の軍團を直接目指しているところから推測すると、沙州の吐谷渾人について歸義軍と何らかの取り決めをしていて、彼を聯行してきたのだろう。

では、彼らの出發地は何処であろうか。まずグループ②の出發地は明らかに納職城であるから、西ウイグルの勢力から發遣されたのは間違いない。一方でグループ①は「城」の警備人と共に伊州まで來たのであるから、出發點は「城」でなければならないし、文脈からみて「城」はやはり納職城を指すと考えるべきであろう。つまり兩方のグループはいずれも納職城から出發したのである。『張議潮變文』によると、大中（856）年6月6日以前から納職城は「其時廻鶻及吐渾居住在彼」であったというから、その状況は兩グループの派遣とも合致している。つまり2グループは西ウイグル支配下の納職城から別個にチベットと歸義軍という2勢力を目指していたということになる。

派遣された兩グループにソグド人がいることは注目に値する。彼らが「ソグド系トルコ人」や「トルコ化したソグド人」²³と呼ばれる西ウイグルに仕えるソグ

²³突厥やウイグルの中のソグド系の人々については多くの關聯研究がありここに列挙することは紙幅が許さないが、2011年までに本邦で出版された論考と歴史用語としての「ソグド系トルコ」等の定義問題に關しては森安2011：18-23にまとまっているので参照されたい。

ド人であり、通譯や相互聯絡の役割を果たしていたことは間違いないが²⁴、特に興味深いのが敵將の何ヤンレクの事例である。彼は西ウイグルに仕えていたソグド人であるが、ここで注意すべきは何ヤンレクがまるでグループの代表であるかのように何度も言及されていることである。これはグループ内の高位のウイグル人であるはずのブイルク、サンゲンは一度しか言及されていないことと對照的であり、伊州側との意思疎通において何ヤンレクがウイグル側の代表を務めたことを示唆する。これは如何なる理由によるのであろうか。

何ヤンレクの背景として重要なのは、彼はチベット語の名前を有していることである。そのような名前を付けているところからして、彼はチベット語話者であったはずである。複雑な背景を持った彼が「案内」を務めたのは、そもそも彼らが本来チベットの勢力とコンタクトをとろうとしていたことにあるに違いない。

一方の伊州側については、歸義軍政權がチベット語を使用して公文書を作成していたことは前述したとおりであり、Pt.1109が作成されたのもその一環である。それに加えてこの文書は流暢なチベット語で記されており、それ自體が當時の伊州にはチベット語に相当習熟した人材がいたことを明瞭に示す。

換言すれば、何ヤンレクと伊州側の共通の言語はチベット語だったのである。そうすると、彼らがチベット語で意思疎通をはかったと考えてもおかしくはあるまい。そもそもチベット帝國崩壊後、河西地域～東トルキスタンにおいてチベット語が國際共通語として使用されていたことを考慮すると²⁵、チベット語話者の需要が一定数あったことは想像に難くないし、またその需要にいちやく對應しようとしたソグド人がいたとしても全く不思議ではない。そしてPt.1109に現れる何ヤンレクはまさにそのような人材であり、その能力によって伊州側との交渉に挑んだと考えられるのである。

結論

本論の考察結果は以下のようにまとめることができる。

- Pt.1109は857年9月12日以降に歸義軍政權下で作成されたチベット語上行文書であり、伊州から歸義軍政府に向けて送られた。
- 差出人の一人は伊州刺使の王和清と考えられる。

²⁴前者のグループの大半は城の警備人であったから、軍人として西ウイグルに参加していたソグド人もいたかもしれない。軍人としてのソグド人については、例えば森部2010(特に89頁以降)、山下2005を参照されたい。

²⁵Cf. Uray 1981, Uray 1988, 武内2002, Takeuchi 2004.

- ・その内容は歸義軍とウイグルとの伊州をめぐる攻防と関わり、857年8～9月の歸義軍勝利後、納職に立てこもったウイグル人たちがチベットに使節團を送ったこと、彼らを捉えたこと、伊州の備えが萬全ではないことなどが報告されている。
- ・納職城の西ウイグル集團から派遣された2グループはいずれもソグド人を含んでおり、彼らは通譯などの役割を果たすことを期待されていたようである。
- ・何ヤンレクはチベット語話者のソグド人であり、伊州の漢人たちともチベット語を使用して交渉を進めたと考えられる。

参考文献（abc順）

- 赤木崇敏（2006）「歸義軍時代チベット文手紙文書 Pt. 1189 譯註稿」『東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書・研究代表者 荒川正晴）大阪大學：77-86.
- 藤枝晃（1961）「吐蕃支配期の敦煌」『東方學報』31：199-292.
- 福嶋恵（2005）「唐代ソグド姓墓誌の基礎的考察」『學習院史學』43：135-162.
- Hamilton, J. R. (1955) *Les Ouighours à l'époque des cinq dynasties d'après les documents chinois*, Collège de France / Institut des Hautes Études Chinoises, Paris.
- (1977) Nasales instables en Turc Khotanais du Xe Siècle. *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 40 (3) : 508 – 521.
- 羽田亨（1957）「唐光啓元年書寫沙州・伊州地志殘卷に就いて」『羽田博士史學論文集 上卷歴史篇』京都、東洋史研究會：585-605.
- 黃征・張涌泉（校注）（1997）『敦煌變文校注』北京、中華書局.
- Imaeda Yoshiro et al. (2007) *Tibetan Documents from Dunhuang Kept at The Bibliothèque Nationale de France and The British Library*. ILCAA, Tokyo.
- Jäschke, H. A. (1881) *A Tibetan-English Dictionary*. London.
- Karlgren, B. (1957) *Grammata Serica Recensa*. Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm.
- 菊池秀夫（1980）「隋・唐王朝支配期の河西と敦煌」榎一雄（編）『講座敦煌2 敦煌の歴史』東京、大東出版社：101-194.

- Lalou, M. (1950) *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang : conservés à la Bibliothèque nationale (Fonds Pelliot tibétain)*, vol. 2. Librairie d'Amérique et d'Orient, Paris.
- 李軍 (2007) 「晚唐五代伊州相關史實考述」『西域研究』2007-1 : 6-17.
- 森部豊 (2010) 『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』大阪、關西大學出版部.
- 森安孝夫 (1990) 「ウイグル文割記 (その二)」『内陸アジア言語の研究』21 : 69-89.
- (1991) 『ウイグル=マニ教史の研究』大阪大學文學部紀要 31・32 : 1-250.
- (2011) 「日本におけるシルクロード上のソグド人研究の回顧と近年の動向 (増補版)」森安孝夫 (編) 『ソグドからウイグルへ——シルクロード東部の民族と文化の交流』東京、汲古書院 : 3-46.
- (2015) 『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋、名古屋大學出版會.
- Pelliot, P. (1912) Les noms tibétains des T'ou-yu-houen et des Ouigours. *Journal Asiatique* 1912 nov.-déc. : 520-523.
- (1916) Le “Cha Tcheou Tou Fou T'ou King” et la colonie sogdienne de la région du Lob Nor. *Journal Asiatique* 1916 Janvier-Février : 111-123.
- (1961) *Historire ancienne du Tibet*. Librairie d'Amérique et d'Orient, Paris.
- 榮新江 (1996) 『歸義軍史研究——唐宋時代敦煌歷史考索』上海、上海古籍出版社.
- (2013) 「大中十年唐朝遣使册立回鶻史事新証」『敦煌研究』2013-3 : 128-132.
- 齋藤達也 (2009) 「北朝・隋唐史料に見えるソグド姓の成立について」『史學雜誌』118-12 : 38-63.
- 高田時雄 (1988) 『敦煌資料による中國語史の研究』東京、創文社.
- Takeuchi Tsuguhito (1990) A Group of Old Tibetan Letters Written under Kuei-I-Chun: A Preliminary Study for the Classification of Old Tibetan Letters. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* XLIV : 175-190.
- (1995) *Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Daizo shuppan, Tokyo.
- (2004) Sociolinguistic Implications of the Use of Tibetan in East Turkestan from the End of Tibetan Domination Through the Tangut Period (9th-12th C.). In : P. Zieme et al. (eds.) *Turfan Revisited: The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, Reimer Verlag, Berlin : 341-348.
- 武内紹人 (1990) 「中央アジア出土古チベット語家畜賣買文書」『内陸アジア言語の研究』5 : 33-67.

- (2002) 「歸義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」 『東方學』 104 : 124-106.
- Thomas, F. W. (1951) *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*. vol. 2, Royal Asiatic Society, London.
- (1955) *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*. vol. 3, Royal Asiatic Society, London.
- Uray, G. (1980) KHRUM: Administrative Units of the Tibetan Empire in the 7th-9th Centuries. In : *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies, Oxford, 1979*. Aris & Phillips, Oxford : 310-318.
- (1981) L'emploi du tibétain dans les chancelleries des états du Kan-sou et de Khotan postérieurs à la domination tibétaine. *Journal Asiatique* 269 : 81-90.
- (1988) New Contributions to Tibetan Documents from the Post-Tibetan Tunhuang. In : H. Uebach and J. Panglung (eds.), *Tibetan Studies: Proceedings of the 4th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Schloss Hohenkammer, Munich 1985*. Kommission für Zentralasiatische Studien, Bayerische Akademie der Wissenschaften, Munich : 515-528.
- 王堯 (主編) (1999) 『法藏敦煌藏文文獻解題目錄』 北京、民族出版社。
- 山口瑞鳳 (1980) 「吐蕃支配時代」 榎一雄 『講座敦煌 2 敦煌の歴史』 東京、大東出版社 : 197-225.
- (1981) 「沙州漢人による古代チベット二軍團の成立と mKhar Tsan 軍團の位置」 『東京大學文學部文化交流研究施設研究紀要』 4 : 13-48.
- 山下將司 (2005) 「隋・唐初の河西ソグド人軍團——天理圖書館藏『文館詞林』「安修仁墓碑銘」 殘卷をめぐる」 『東方學』 110 : 65-78.
- 山本明志 (2011) 「13・14 世紀モンゴル朝廷に赴いたチベット人をめぐって——チベット語典籍史料から見るモンゴル時代」 『待兼山論叢』 (史學篇) 45 : 27-51.
- 嚴耕望 (1985) 『唐代交通圖考』 第 2 卷 : 河隴磧西區. 臺北、中央研究院歷史語言研究所.
- 吉田豊 (2006) 『コータン出土 8-9 世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』 神戸、神戸市外國語大學.
- 周季文・謝后芳 (2006) 『敦煌吐蕃漢藏對音字匯』 北京、中央民族大學出版社.

(作者は神戸市外國語大學客員研究員)